慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶應大学が、そうありうること
Sub Title	On culture and Keio
Author	船曳, 建夫(Funabiki, Takeo)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2010
Jtitle	Newsletter Vol.13, (2010. 9) ,p.1- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000013-0010

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　グローバルCOEプログラム　論理と感性の先端的教育研究拠点

Newsletter

2010 September No. 13

CARLS

Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility

Contents

慶應大学が、そうありうること
On Culture and Keio 1

第9回プラトン・シンポジウム
市民公開講座
プラトン哲学の現代的意義
～『ポリテイア』（国家篇）を中心に～
The 9th Symposium Platonicum of the International Plato Society
The Significance of Plato's Philosophy in the Contemporary World: Reconsidering the Politeia 2

慶應義塾大学言語教育シンポジウム
英文解釈法再考
～日本人にふさわしい英語学習法を考える～
Keio University Symposium on Language Teaching: Reevaluating How to Interpret English Constructions, Phrases, and Passages 3

英文論文執筆のための講習会 2010
The Workshop of Writing Research Papers in English for Young Researchers

脳の講習会～基礎知識～
Seminar Series on Brain Science 4

シンポジウム
Contingency as a Fundamental Determinant for Human Behavior: Quantitative and Developmental Views from Young Behavior Analysts

Dr. Warren H. Meck 講演会
Functional and Neural Mechanisms of Interval Timing 5

GCOE ワークショップ
真理の度合理論は適切か?
～ファジイ論理と真理理論～
Lecture by Dr. Shunsuke Yatabe: Relationship between Fuzzy Logic and Truth Theory

Akihiro Kanamori 教授・
Juliet Floyd 教授講演会
Lectures by Professor Akihiro Kanamori and Professor Juliet Floyd

研究セミナー
トランスナショナルな移民の生活感情：
文化人類学的アプローチ
Emotional Terrain of Transnational Immigrants: a Cultural Anthropological Approach 6

活動報告 7

研究員紹介・事務局だより 8

慶應大学が、そうありうること
On Culture and Keio

船曳建夫　東京大学大学院総合文化研究科・文化人類学教授
Takeo Funabiki　Professor, Department of Cultural Anthropology, University of Tokyo

狭い意味での人間の文化、芸術や学問は、時として、数百年のスパンで、衰退することがある。

『源氏物語』を生んだ後、日本の物語文学はどうなったか。鎌倉、室町の物語群を見ると、質、量、共に劣化したことが分かる。その回復は、滝沢馬琴や明治の小説まで待つしかなかった。ギリシャの哲学は、そこを頂点として、あとは下るだけであった。中国の諸子百家も、その議論の高みは、次の時代に続くことはなかった。人間の文化は、その水準が下がることがあるのだ。

ただ、さらに見てみると別の事態が起きているのも分かる。数百人かせいぜい数千人の読者しか持たなかったであろう平安文学は、室町になると、万を優に超える読者を獲得することとなった。ギリシャの哲学も諸子百家の議論も、その後の祖述者や注釈者によって、広い地域の多くの人々によって引用され、生活の中にも活用されることとなった。言い換えれば、「普及」したのである。

私は、現在の日本を含めた経済的先進国において、芸術や学問は活発に普及しつつあるが、その水準は、多くのジャンルにおいて、今後、低下するのではないかと予測している。その予測は、芸術と学問の精華というものは、大き過ぎず小さ過ぎない、限られた競争者たちの、競争に集中することの出来る安定した環境から生み出されるとの考えから来ている。過去において文化の競争者たちは、平安の貴族、アテナイの「市民」、中国古代の政治顧問団であり、彼らは、身分制の上に立ち、競い合い、切磋琢磨するエリートとして、芸術や学問を生み出したのである。近代では、前時代の貴族的特権の継承者、富裕層、大学の教育・研究者がそれである。彼らが、文章や議論の水準を高く保つことが出来たのは、限られた数のサークル内の競争であるため批判の基準を共有しやすく、互いの評価が強く働くからだ。

現在、近代がもたらした恩恵は、そうした文化生産により多くの者を参入させることが出来るようになった。ここでも、参入者を、批判と評価によって適切に制限すれば、理論的には、より多くの優れた参加者によって文化の水準は保たれ、または上昇する。しかし、そうした制限は適切には機能しない。多くの者による参加の要請を、少数の者が抑えることは出来ないからだ。限られた競争者たちの方が自分で水準を下げることはない。彼らの活動と、社会制度の変化、伝達技術の進歩が「普及」をもたらし、それが結果的に、水準の低下をもたらす。つまり、文化は洗練と普及の波動を繰り返すのだ。

さて、こうしたことは学問においても然りであろう。社会が、学問の応用と普及を強く要請する傾向は、強まっている。自然科学はさておき、私は、人文･社会科学では、哲学から歴史学、経済学に至るまで、近代の興隆は、もはやある頂点を過ぎた、と考えている。ノーベル文学賞も経済学賞も、年々受賞者は小粒になっている。時代は、いまや多くの解釈者や祖述者によって、複製技術と伝達技術を力とし、学問がその頂点を低めながらも「普及」を拡大している過程に入ったと考えられる。

こうした中、私は、大学は、「普及」の仕事をすべきではない、またはすべての大学がその仕事にかかずらわってはいけない、と考える。もちろん、大学がある時点での政治・社会体制の要請を拒否することは難しい。とりわけ、日本の国立大学のように、国民エリートの養成機関として始まったところの、青い痣を尻に隠し持つところは。

そのとき、慶應義塾大学が、現在の国家体制が始まる以前に開学（安政5〔1858〕年）された唯一の大学であることは、大いなる意味を持つであろう。現国家体制から距離を取る理念を持ちうる大学だけが、今後の学問の頂点の低まりと裾野の拡大の潮流の中で、現在の学問の水準を、たとえば数百年後、潮目の変わるときまで、どのような社会体制であろうと、生き延びて、持ち堪える可能性がある。それは、アリストテレスの哲学が中世神学とその後のルネッサンスまで、地域を変え、担い手を変え伝えられように、人類的立場からの知の企図となる。慶應義塾大学は、そのような任に当たるにふさわしい大学だし、そうありうる、と考えるのである。

(see page 5 for English summary)

シンポジウム
行動の基礎過程としての随伴性：若手研究者からの数量的・発達的見解

Contingency as a Fundamental Determinant for Human Behavior: Quantitative and Developmental Views from Young Behavior Analysts

（6月5日　三田キャンパス東館４階セミナー室）

2010年6月5日の午後から、遺伝と発達班の主催で、California State University の Paul Romanowich 博士をお迎えしてのシンポジウムが開かれました。Romanowich 博士は行動分析学の観点から、ハトを対象としたマッチング法則や条件性強化の定量分析を進められてきました。同時に、NBA におけるシュート傾向のマッチング法則を用いての分析、喫煙と禁煙行動の行動分析といった日常社会での行動の数量的研究などの、基礎と応用の双方にわたる多彩なご研究を推進されています。今回の来日にあわせ、日本における若手研究者との間での、行動随伴性めぐる共同シンポジウムという形式で行われました。外部の方々の多数のご参加を得られ、約50人収容の会場がいっぱいになるほどの盛況となりました。

シンポジウムの中心は Romanowich 博士の発表であり、彼が近年取り組んでいる喫煙行動の改善プログラムが紹介されました。行動分析学の基礎的な知見を活かし、適切な行動随伴性を設定することで禁煙を促すことができることが示されました。その後日本の若手研究者３名からの発表が続きました。慶應義塾大学社会学研究科の熊仁美研究員からは、自閉症児を対象とした、共同注視を利用した介入プログラムが紹介されました。本グローバル COE の丹野貴行研究員からは、行動随伴性の概念の重要さと、それを数理モデルの域にまで精緻化することを目指した研究が紹介されました。最後に東京女学館大学准教授の井垣竹晴博士から、随伴性が変化した際にいったい何が起こっているのかを調べる変化抵抗研究が紹介され、その制御変数は何なのか、また動物で得られた基礎的な知見がどのような応用研究へとつながるのかが論じられました。いずれの発表も、国際誌や国際学会で発表されてきた内容を含むレベルの高いものであり、若手研究者がお互いの知識を交換する有意義なシンポジウムとなりました。またシンポジウムの進行が英語で行われ、参加した大学院生にとっては英語でのコミュニケーションを取る絶好の機会ともなりました。

（丹野貴行）

Symposium entitled “Contingency as a Fundamental Determinant for Human Behavior: Quantitative and Developmental Views from Young Behavior Analysts” was held on June 5th at Keio University. Each speaker introduced their studies concerning contingency in experimental and applied settings.

講演会　Dr. Warren H. Meck 講演会

Lecture by Dr. Warren H. Meck: Functional and Neural Mechanisms of Interval Timing

（5月26日　三田キャンパス東館4階セミナー室）

2010年5月26日、Duke 大学教授の Warren H. Meck 博士をお迎えし、“Functional and Neural Mechanisms of Interval Timing” のタイトルで、講演が行われた。講演では、Meck 博士の長年の研究テーマである、「時間知覚のメカニズム」について、電気生理学、臨床研究、行動実験、脳機能イメージングなど、多岐にわたるアプローチと、そこから得られた知見が発表された。さらに、それらの知見に基づいて構築された、時間知覚の神経機構のモデルや、そのモデルで重要な役割を果たすと示唆される大脳基底核の有棘ニューロンの働きが紹介された。講演の後半には、有棘ニューロンの解剖的特性と機能的特性の関係や、関係する神経伝達物質の働きなど、参加者を交えて、活発なディスカッションが行われた。

（四本裕子）

A special lecture was delivered by Dr. Warren H. Meck, Professor of Duke University. Dr. Meck presented electrophysiological, clinical, behavioral, and imaging studies, and introduced a model for the interval timing.

１ページ目の英訳　**On Culture and Keio**

If we suppose that cultures evolve in time, it comes at no surprise that there are declining as well as rising phases in their histories. As the Muromachi culture and Hellenism clearly illustrate, declining periods are also times of mass culture. We can say that contemporary Japan is in such a state of cultural diffusion. If so, it is all the more important for the University to well protect the core elements and values of our society – academic and other. I believe that Keio University has a unique role in this regard as an institution with a history independent from and longer than the modern state in Japan. I profoundly hope that it can live up to such a great responsibility!